

連載コラム



みずき野と
その周辺の
植物と昆虫



第 40 回

花壇の花(1)

～ビオラ、ハボタンなど～



もとよし ふさお
本吉 総男

2018 年 2 月

みずき野町内では、園芸植物のいろいろな花を四季を通じて見ることができます。特に、2つの調整池の周辺は花壇がつけられ、町内のボランティアサークル「ポケットの会」の方々によって管理されています。また別のサークルによって管理されている「みずき野ガーデン」でも花々が美を競っています。第2調整池の北側に隣接する「郷州里山」は「郷州里山の会」によって管理される自然林ですが、一部、園芸植物も植えられています。さらに道路の脇、公園、小学校周辺、公民館の前庭にも、多くの方々によって小さな「花壇」がつけられ、道行く人々の目を楽しませてくれます。

今回から季節ごとにみずき野町内に見られる花壇の花について書いていく予定です。



園芸植物とは？

園芸植物は園芸作物ともいい、元は野生植物であった種を人が選び出し、改良を重ねて人の目に美しい花をつける植物に変えていったものです。改良の元となった野生植物の多くは虫媒花（昆虫の媒介によって受粉する花）をつける植物です。これらの植物は繁殖に昆虫を利用します。花の中に蜜を作って、昆虫に与える代わりに昆虫に花粉を運ばせ、受粉の助けをしてもらいます。

虫媒花は昆虫の来訪を促し、花粉を効率よく昆虫の体に着くように工夫しています。花卉や萼を昆虫好みの色にして昆虫を誘います。通常、植物によって、来訪する昆虫が異なるので、虫媒花はお得意さんである昆虫が花粉をたくさん体につけるように、形をいろいろに変えています。

人は美しい、またはおもしろいと感じる虫媒花をつける植物を選び出し、繁殖させ、突然変異や人為的な交配によって生じるお気に入りのものを選択し、さらに交配の相手を替えたり、染色体を増やしたり、さまざまな工夫をすることによって人目をひく品種を作り上げました。例外はありますが、もはや自然の中では、独力で生きられず、それらの生存には人に頼らなければならないものがほとんどです。美しい花（葉の場合もある）をつけることによるのみ、彼らの生存が保証されます。いわば園芸植物の花や葉の美しさは、自然から受け継ぎ、人が作り出した芸術品です。

1 パンジーとビオラ

パンジーとビオラは、ヨーロッパやその他の地域に自生するスミレ属の植物を交配してつくられた園芸植物です。花はよく似ていますが、大輪のものをパンジー、小輪のものをビオラと呼んでいます。しかし品種改良によって、中間のものも多くつくられ、パンジーかビオラか区別の難しい品種もあります。

みずき野の花壇に多く植えられているのはビオラです。ビオラは寒さに強く、1月半ばには早くもたくさんの花をつけています。花の少ない季節ですから、花壇では特に目立ちます。また、花期は大変長く、初夏まで楽しめますが、3～4月頃がもっとも美しく、株一杯に花が咲きます。



パンジー 2月上旬 わが家の庭



ビオラ 1月下旬 第1調整池花壇

因みに、パンジーやビオラを食害する昆虫を紹介します。ツマグロヒョウモンの幼虫です。ツマグロヒョウモンは美しい南方系のチョウで、関東地方には1990年以前にはほとんどみられなかったのですが、温暖化によって、関東地方でも急激に増え、現在はごく普通に見られるようになりました。年に数回発生し、幼虫やさなぎ蛹のかたちで越冬します。パンジーやビオラの株に幼虫がついていることに気づかないでいると、短期間で葉を食い尽くされますので、注意が必要です。



ツマグロヒョウモンの幼虫
6月下旬 わが家の庭
ビオラやパンジーの大敵です



ツマグロヒョウモン
9月下旬 第2調整池花壇

←雄

↓雌



パンジーとビオラの園芸の歴史

ヨーロッパには、ビオラ・トリコロールというパンジーの一種が野生しています。この野生種を最初に花壇の花にしたのは、イギリスのレディー・メリー・ベネットとお付きの庭師でした。19世紀の初め、彼女らはこの植物をたくさん植え、そのなかから見栄えのするものを選抜し、肥料を与えて、見事な花壇をつくったそうです。

それに続いて、ビオラ・トリコロールの品種改良を始めたのは、イギリス海軍の提督ジェームス・ガンビエ男爵の庭師トンプソンでした。トンプソンはビオラ・トリコロールに他の種を交配して、パンジーのいろいろな品種をつくりました。

その後のパンジーの品種改良は英国やヨーロッパの国々の熱心な育種家によって進められ、非常に多くの品種が生まれました。英国で作られた品種はショウ・パンジー (Show Pansy) と呼ばれました。続いてフランス、ベルギー、ドイツの育種家がショウ・パンジーを元に、品種改良を進め、大輪で鮮やかな品種が作られ、これらがイギリスに逆輸入されて、さらに改良が加えられました。これらの品種はファンシー・パンジー (Fancy Pansy) と呼ばれました。

19世紀末、スコットランドのジェームズ・グリーブは、野生種ビオラ・ルテアを主として使い、多くの種や品種を交配して、ショウ・パンジーやファンシー・パンジーよりコンパクトで花をたくさん着ける品種を作り、ビオラと名付けました。これがビオラのもっとも古い品種と思われます。ついで、チャールズ・スチュアートという人が、ピレネーに原産するビオラ・コルヌータを元に、小さくて香りのある花をつける品種をつくりました。この品種はタフテッド・パンジーと呼ばれています。

2 ニホンスイセン



ニホンスイセン 1月中旬 さくらの杜公園

ニホンスイセンと他のスイセンについては、[「第31回 スイセンの仲間」](#)でかなり詳しく紹介しています。その中で、「ニホンスイセンは最も普通に家庭の庭などで栽培されているスイセンだと思いますが、みずき野周辺の公園や花壇や道端では見た記憶がありません」と書きました。しかしその後、さくらの杜公園、郷州小学校西門近くの花壇、および、みずき野ガーデンにニホンスイセンが植えられていることがわかりました。ニホンスイセンは冬の花壇にもっともふさわしい植物のひとつです。

3 ハボタン

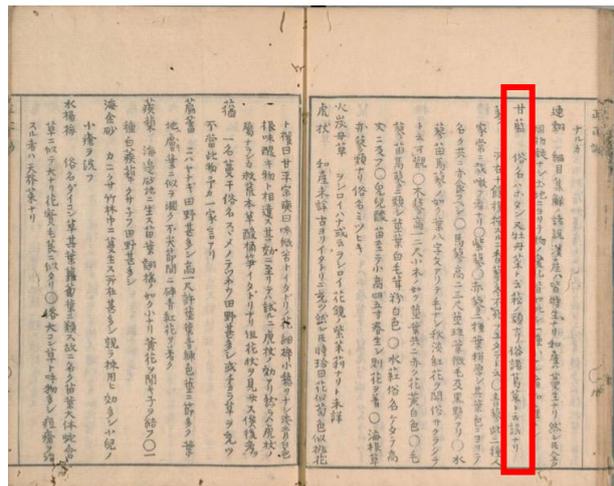
ハボタンは結球しないキャベツの一種ケールが園芸用に改良されたもので、花より色彩豊かな葉を鑑賞します。花の少ない真冬の花壇によく植えられています。ハボタンは4～5月頃、菜の花に似た黄色い花をつけますが、花の咲いたハボタンもきれいなものです。

江戸時代の博物学者、^{やまおかきょうあん}山岡恭安の書『^{ほんぞうせいせい}本草正正論』(1778)には、

「^{かんらん}甘藍俗名^{またぼたん}ハボタン又^な牡丹菜ト云、^い菘^{すずな}ノ^{たぐい}類ナリ俗^{ぞくにしよかつさい}諸葛菜ト云^い誤ナリ」

と書かれ(右画像の赤い四角で囲った部分)、ハボタンという名の最古の記述です。ここに記されたハボタンが現在のハボタンと同様のものかどうかはわかりません。むしろケールに近いものだったかもしれません。その後、鑑賞用のハボタンが江戸時代に日本で盛んに品種改良されてきました。

欧米ではかつてハボタンに対しては関心が薄かったようですが、現在ではフラワーキャベジまたはオーナメンタルキャベジと呼ばれ、かなり盛んに栽培されているようです。



本草正正論
(国会図書館ホームページよりダウンロード)

ハボタンはみずき野の花壇にもところどころ植えられています。ハボタンは元々キャベツですから、「キャベツの青虫」すなわちモンシロチョウの幼虫が食害します。せっかくのきれいな葉を食い荒らしますから、見つけたら除去して下さい。



ハボタン 1月下旬 中央広場花壇

4 クロッカス

クロッカスは、秋に咲くサフランに近縁の園芸植物です。クロッカスには秋咲きの種もありますが、通常目にするのは早春に咲く種です。多く見かけるクロッカスには2種あり、植物学ではそれぞれハナサフランおよびキバナハナサフランとして区別していますが、園芸では、両種ともクロッカスと呼んでいます。

ハナサフランは南ヨーロッパ原産の植物ですが、いろいろな栽培品種がつくられおり、その多くは薄紫～濃紫色の花を咲かせます。キバナハナサフランはギリシャから小アジアに原産し、その名の通り黄色い花を咲かせます。キバナハナサフランからも多様な品種がつくられました。通常、キバナハナサフランの方がハナサフランより先に開花します。

クロッカスは早春の光を受けて輝く、可憐な花ですが、花期が短いのが残念です。



クロッカス 3月上旬 中央広場花壇



クロッカス 3月中旬 わが家の庭

5 アネモネ

アネモネの原産地はヨーロッパ南部から地中海沿岸で、ヨーロッパでは古くから愛でられている植物のひとつです。ギリシャ神話では、アフロディテ(ビーナス)の愛人アドニスが猪に突かれて死んだとき、アフロディテはその死を嘆いて、アドニスから地上に流れた血をアネモネに変身させたと伝えられています。このテーマは美術作品にもよく現れます。



アドニスの目覚め ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス(1899)
(ウィキメディア・コモンズよりダウンロード)

ギリシャ神話ではアドニスは死んでしましますが、ウォーターハウスは悲劇が起こる以前の幸せそうな女神と恋人を題材にしたのでしょうか。あるいは、アドニスは死んでいないことにしたのでしょうか。女神やアドニス、キューピットたちの周辺にはアネモネの花が咲き乱れています。

アネモネはキンポウゲ科の植物で、数種ありますが、園芸用にもっともよく使われるのはアネモネ・コロナリアという種で、それからいくつかの栽培品種がつけられました。「デカン」もその一つで、私の好きな園芸植物のひとつです。美しく色づいていて花卉のように見えるのは、実は花卉でなく、^{がくへん}萼片です。アネモネには花卉はありません。

アネモネはみずき野町内の花壇では見たことがありませんが、春の町内を飾ってほしい花ですので、あえて入れてみました。



アネモネ 3月下旬 わが家の庭

6 クリスマスローズ

クリスマスローズはみずき野の花壇には植えられていないようですが、人気の花で、家庭の庭にも多く植えられており、垣根から顔を出しているものもしばしば見かけます。

クリスマスローズには、ヨーロッパ原産で、クリスマスの頃から真冬に咲くクリスマスローズと早春に咲くハルザキクリスマスローズがありますが、普通、花壇に見られるのは東欧に原産するハルザキクリスマスローズで、両種とも、キンポウゲ科の植物です。ハルザキクリスマスローズも通常クリスマスローズと呼ばれています。

クリスマスローズでは、鮮やかに色づくのは花弁ではなく、萼片がくへんです。花弁も萼片がくへんの内側にありますが、小さくてほとんど目立ちません。



クリスマスローズ
3月下旬 わが家の庭

7 ノースポール

ノースポール(別名:スノーポールギク)は南ヨーロッパ～北アフリカ原産のキク科、レウカンセマム・パルドサムの一品种で、花は1月から咲き始め、初夏まで咲き続けます。園芸植物としては古いものではありませんが、いまでは春の花壇を飾る主要な花です。



ノースポール 3月下旬 第2調整池花壇

8 カレンデュラ

カレンデュラというより、キンセンカという方がわかりやすいかもしれません。カレンデュラの仲間は地中海沿岸に原産するキク科の植物で、日本ではそのうちの2種が栽培されています。キンセンカとして昔から親しまれている種は、カレンデュラ・オフィシナリス、また最近ではカレンデュラ・アルベンシスの品種も栽培されるようになりました。アルベンシスは、ホンキンセンカとも呼ばれています。

キンセンカ(金盞花)の名は伊藤伊兵衛著『いとう いへい花壇地錦抄』(1695)や貝原益軒著『かいばらえきけん花譜』(1698)に出ているので、江戸前期には日本でも栽培されていたようです。江戸時代に栽培されていたキンセンカはカレンデュラ・オフィシナリスで、アルベンシスはまだ入っていなかったとされています。

早春のみずき野の花壇には、とうこうしよく橙黄色のカレンデュラが咲いていました。カレンデュラ・アルベンシスの一品种「冬知らず」です。



カレンデュラ 3月下旬 第2調整池花壇

9 ヒアシンズ

ヒアシンズはヒヤシンズと書くこともあります。地中海地方に原産する植物で、以前はユリ科に入れられていましたが、現在はキジカクシ科に属しています。日本では春の花壇を飾る主要な花のひとつです。



ヒアシンズ 3月下旬 第2調整池花壇

ヒアシンズ属の学名はヒュアキントスで、ギリシャ神話に出てくる美少年の名ヒュアキントスに由来します。ヒュアキントスは太陽神アポロンの愛童でしたが、アポロンの投げた円盤に当たり即死しました。アポロンは嘆いてヒュアキントスの血を植物に変えました。ギリシャ神話でいうこの植物が、現在のヒアシンズに当たるかどうかはわかりませんが、この花は美少年ヒュアキントスの名にふさわしい美しさです。

ヒヤシンズ 薄紫に 咲きにけり 初めて心 震ひそめし日

北原白秋

北原白秋の若き日のこの歌は、初恋の心を薄紫のヒアシンズに重ねた初々しい歌です。